

株式会社ジーデバイス

ほんのひと手間かけるだけで
知財流出の抑止力になる

「キャッチセンサ」のブランドで、振動・傾斜を検知するセンサをはじめ、加速度・衝撃などのセンサを企画・開発・販売している。電極体に極小のボールを使用した「キャッチセンサ」は、世界最小をめざした独自の特許製品。無公害スイッチとして各分野のユーザーに受け入れられ、金庫の防犯用センサから液晶腕時計のバックライト点灯用スイッチに至るまで幅広く利用されている。

主な権利

2002年：特許 第4153213号
2009年：意匠登録 第1396075号
2011年：特許 第4805934号
2013年：特許 第5401167号
2013年：特許 第5443639号

会社概要

所在地：東京都中野区東中野 1-56-1
大島ビル本館 301
電話：03-6908-6315
URL：http://www.catch-sensor.co.jp
業種：電気機器部品の企画・開発・販売
設立：1996年（平成8年）
資本金：300万円



代表取締役：嶋瀬 照雄さん

情報のやり取りを慎重に
考えなければ失敗につながる

株式会社ジーデバイスが開発しているメカニカルセンサは、日本のモノづくりを代表するような、細密で画期的な部品である。その用途は非常に幅広く、さまざまな産業分野を支えている。

工場を持たないファブレスメーカーである同社は、直接モノづくりをしているわけではないため、製造を他の会社に委託している。知財センターを活用する以前は、その情報のやり取りの間で、ずいぶん失敗もあったという。

相手側の契約書に合わせると
知財を奪われる落とし穴がある

嶋瀬社長は、こう語る。「私自身が人を信じてしまう性分なので、相手側の書式に合わせて契約してしまうことがあったのです。ところが、その契約書には抜け道があって、私たちが特許を出願しようとしたら、製造を依頼していた会社が先

に出願していたことがありました。それで知財を権利化できなかったことが、何度もあります。当時お世話になっていた弁理士の先生には『情報ほど高いものはないんですよ』と、ずいぶん叱られましたね」

同社が開発する製品の技術は、一般には広く知られていないために、技術のコアの部分を握られてしまうと、どんどん権利化されてしまい、根こそぎ奪われてしまう危険性がある。それに気づいた時は、すでに手遅れだった。「ずいぶん怖い思い、イヤな思いをさせられました」と、嶋瀬社長はしみじみと語られた。

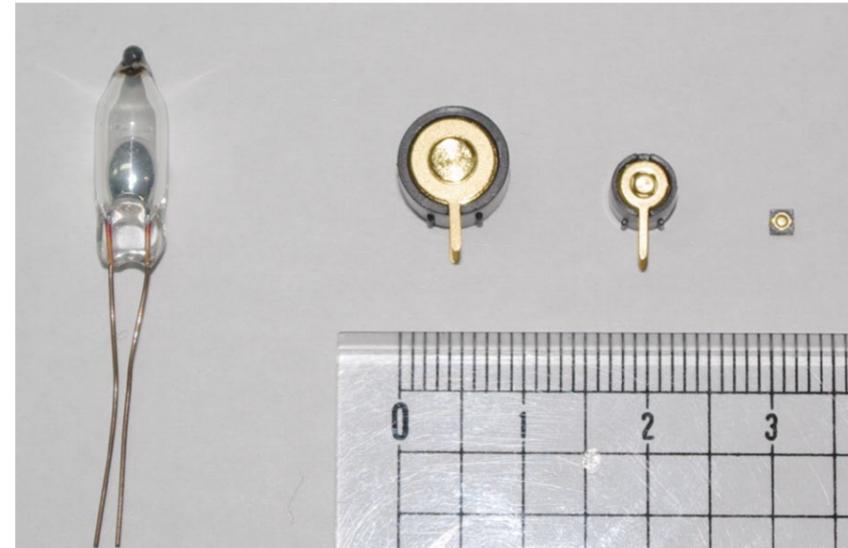
知財センターは固い場ではなく
相談しやすいのが特徴だった

知財センターとの出会いは、2004年のこと。1.5ミリ角チップ超小型多方向傾斜検知センサの技術によって、「東京都ベンチャー技術大賞」の特別賞を受賞したことがきっかけだった。都の優秀なベンチャー企業を発掘して、産業の活性

化をはかるという取り組みであり、当時の石原慎太郎都知事からは「これは非常に画期的な技術なので、都が元気になるように、しっかりやってほしい」と、直接の激励も受けたという。その技術を知的財産としてどう育成・発展させて行くかを相談するために、初めて知財センターを訪れた。「それまで、公社や知財センターは、中小企業が気軽に相談できるような場所ではないと勝手にイメージしていました。でも一度敷居をまたぐと、まったくそんなことはありません。知財センターのアドバイザーは、私たちの会社の形態や、客先とのやりとりの内容を詳しく掘り下げ、手厚くフォローアップしてくれますね」

契約の知識を持っていることを
アピールするのも重要

知財センターとの付き合いは10年ほどになるが、足しげく通うようになったのはここ2年ほどのことだという。「それまではまだ遠慮があるというか、他にも多



ジーデバイスの「キャッチセンサ」…振動・傾斜センサは、左から右へと進化し、極小化している。左は水銀を使用していた昔のセンサであるが、同社の開発製品は水銀を使わないマーキュリーフリーであり、環境の保全に配慮している。いちばん右のセンサはわずか2mm角である。



2004年には、「1.5ミリ角チップ超小型多方向傾斜検知センサ」の技術によって、「東京都ベンチャー技術大賞」の特別賞を受賞した。当時の石原慎太郎都知事から表彰される嶋瀬社長。

くの企業さんが来られるでしょうから、あまり何度も相談してはいけないと思っていたのです。でも担当のアドバイザーから、『契約に絡む内容については、どんなことでも相談してもらっていいですよ』と言われて、考えが変わったんです。知財センターを積極的に活用するようになってからは、おかげさまで、私たちの技術を取り込まれ、奪われるようなことはなくなりました。私たちの側から『こういう契約で、次のステップに行かせてください』と提案することによって、相手側に『ジーデバイスは、契約に対する知識を持っているな』と認識してもらうことができるからでしょう。私たちの世界ほど、知財が重要となる分野はありません。ほんのひと手間かけるだけで、相手企業の意識が変わり、知財流出の抑止力にもなるんです」

事業化チャレンジ道場も
経営にとっても有益だった

知的財産の重要性を感じた嶋瀬社長は、

東京都中小企業振興公社の「事業化チャレンジ道場」にも足を運んでみた。「申し訳ないけれど、当初はたいしたことないだろうなと思っていたんです。でも一度参加してみようと思って、モノづくりのイロハから学んだところ、ものすごく勉強になりました。3C、4P、SWOT分析などを毎回徹底してやるんですよ。経営が一本柱だと難しいこともよく分かりましたし、製品のポジショニングの重要性も改めて理解することができました」

一生懸命仕事に向き合うと
応援してくれる人が出てくる

ジーデバイスは、今年で設立19年目を迎える。嶋瀬社長は、これまでの会社の歴史を振り返ってこう語った。「おそらく良

い時が1割、悪い時が9割ぐらいでしょう。今まで続けて来られたのは、良い1割の時に、次のことを考えて仕込んでおいた部分があったからだと思います。それに、自分がやろうと思ったことに真剣に向き合っただけで一生懸命やっていると、必ず応援してくれる人が出てきます。誰かが後押ししてくれるんです。ですから私は、なぜか成ると思っています。60歳を過ぎましたが、こんなにワクワクする楽しい仕事はないですし、東京に居て良かったなと思いますね。これからずっと、そして次の代においても、末長く社会に貢献できるものを提供していきたいですね」

今後も期待されるセキュリティ分野や、小型軽量化が要求される携帯機器分野など、同社の活躍はますます幅を広げながら、豊かな社会を支えてくれそうである。



公社のサポート機能をトータルに活用

権利化できるものは権利化するという方針でお手伝いしています。同社は、知財センターの他にも、事業化チャレンジ道場、ニューマーケット開拓支援事業など、公社のさまざまな支援機能を積極的に活用されています。このことによって複眼的な見方をする事ができ、トータルなメリットが得られるでしょう。 担当：秋葉原 福永アドバイザー